

ハイデルベルク信仰問答より

問 82 信仰告白と生活によって、自分を不信仰な者、また神の敵であることを示している者が、この聖餐にあずかるのを、認められるべきでしょうか。

答え それは認められません。それは神の契約が侮辱され、神の怒りがすべての会衆にふりかかるからであります。それゆえ、キリストとその使徒たちの聖餐によるならば、キリスト教会はふさわしくない者の生活が改まるまで、鍵の役目によって、そのような者を閉め出す責任があります。

ここで示されているのは、いわゆる「陪餐停止」の問題でしょう。ある人の状態を見て、教会として一定期間その人が聖餐を控えるよう指導することです。「**信仰告白と生活によって、自分を不信仰な者、また神の敵であることを示している者**」という表現はやや曖昧ではありますが、具体的な事例としては不品行や偶像礼拝が挙げられるでしょう。難しいのは、そのような罪は隠れたところで行なわれていることが多く、当事者はなかなか公に告白できないということです。中には問題を抱えたまま素知らぬ顔で教会生活を続けている人もいるかもしれません。しかし、その問題はやがて何らかの形で表面に現れ始めるでしょう。神との関係が壊れたまま教会生活を続けることは、本人にとって苦痛になっていくからです。

罪が明らかになったとき、本人が進んで告白する場合と、別のところから問題が発覚した場合とでは、その扱いは大きく違ってくることになります。罪を告白するとき、その人の内では悔い改めを始めている可能性が高く、それだけ立ち直りも早くなるでしょう。しかし、自分の中でどうしても問題が解決できなくなって牧師に相談したものの、本質的には心が変わっていないというケースもあります。また、問題が巡り巡って発覚してきた場合、その人はまだ悔い改めのスタート地点にすら立っていないことが多いので、これは時間がかかるケースが多いでしょう。自分が神と会衆との前に犯してしまった罪を認識するところから始めなくてはならないからです。陪餐停止とは、そのためにあるのです。なぜ自分が聖餐にあずかれないのか、一種の疎外感を体験することにより、今のままでは神の家族しか味わうことのできない恵みから遠ざかったままであることを認識する必要があるのです。

「**神の契約が侮辱され、神の怒りがすべての会衆にふりかかるから**」とあります。共同体の中で、一人の人の罪によって会衆全体に災いが下った事例は、ヨシュア記のアカンの罪に見ることができるでしょう（ヨシュア7章）。アカンは「滅ぼし尽くすべき献げ物」を盗み、自分のものとして隠していました。そして、その罪によってイスラエルはアイに大敗したのです。敗北の原因を主に問うたところ、神のものを盗んだ人がいることが発覚しました。

アカンはヨシュアに答えた。「確かに私は、イスラエルの神、主に罪を犯しました。私はこのようなことをしてしまいました。戦利品の中に、美しいシニアルの外套が一着、銀二百シケル、重さ五十シケルの金の延べ棒一本があるのを見て、私はそれらが欲しくなって取りました。今それらは、私の天幕の中の地面の下に隠してあります。銀もその下にあります。」（ヨシュア7:20-21）

この記事によると、残念ながらアカンが自ら罪を告白したのではなく、くじでだんだんと犯人が特定されていき最後に選別されてしまったことが分かります。この時、アカンは石打ちの刑に処せられ、それによって神の怒りは収まりました。

アカンのストーリーは読者を震撼させますが、この記事は神を侮ってはならないことを教えています。教会の中で、誰かの罪が隠されたままの状態になっていると、それは何らかの意味で共同体に「歪み」を引き起こすのです。それによって教会が分裂したり、神の聖を表せなくなったり、悪魔の活動の場となり得ます。

それゆえ、キリストとその使徒たちの聖餐によるならば、キリスト教会はふさわしくない者の生活が改まるまで、鍵の役目によって、そのような者を閉め出す責任があります。 陪餐再開の条件として「**ふさわしくない者の生活が改まるまで**」という期間が設けられていますが、それは罪から離れキリストに立ち返ったことが明確になるということです。最後の晩餐のとき、イスカリオテのユダが退席してからパンと杯が配られたのも、「**キリストとその使徒たちの聖餐**」ということの意味なのかもしれません。「**鍵の役目**」については次回以降で詳しく学ぶこととなりますが、かいつまんで申しますと、教会は罪を見極め聖なるキリストのからだにそれを残さない責任を負っているということです。

このような教理を日頃から学んでおくことは重要です。なぜなら、会衆全体に罪の恐ろしさが認識され、罪を予防することにもなり、万が一罪を犯してしまったときにどう行動すべきかを心に示す布石となるからです。これを知らなくては、罪を隠したまま歩み続け、その罪が何らかの意味で教会を汚していくという最悪の事態を招くことになるかもしれません。「戒規」は、キリストのからだなる教会を「聖なるもの」として保つために必要不可欠なものなのです。